

# 自然と文化科 活動記録

|    |                                                       |                |
|----|-------------------------------------------------------|----------------|
| 日時 | 2024年11月15日 10:00~15:00                               | 担当者            |
| 場所 | クロスパル高槻 午前：公開講演会 8階イベントホール<br>午後：各委員会、全体会議、班会議、運営委員会等 | 文・写真：<br>溝部 浩二 |
| 備考 | 参加人数 1班20名 2班17名 3班17名 4班18名 外部5名 合計77名               |                |

公開講演会の概要は以下のとおりである。

1. 講演のテーマ：「染色に利用される植物」
2. 講演者名：京都薬科大学 薬用植物園 助教授 月岡 淳子先生
3. 講演者略歴：大阪府吹田市生まれ、香川大学農学部生物資源科学科卒業  
京都薬科大学薬学部で薬学博士、薬用植物園助手を経て現在に至る。
4. 講演要旨：



## (1) 京都薬科大学薬用植物園について

来年で創立100周年。伏見区にあり甲子園球場グラウンド程度の広さ。約800種類の薬用植物を育てている。ほかに山科区に御陵園という薬用植物園があり、2園体制になっている。

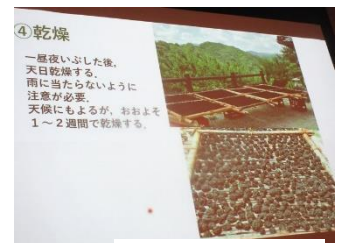
## (2) 「延喜式」に見る染料植物

「延喜式」とは平安時代中期、醍醐天皇の命により編纂された律令とその施行細則で、その中に染色や薬用に用いられた植物が、税として国に納められた状況が記載されている。日本各地のどの地域が生産地で、どのくらいの量が作られたかが分かる。薬草を栽培する薬草園のようなものもあった。

- ① 黄檗（おうばく）：キハダの周皮を除いた樹皮。媒染剤なしで黄色に染めて公文書などの用紙や、防虫作用もあるため経文用紙としても使われた。
- ② 藍葉（らんよう）：アイの葉。藍染の青で「ジャパンプルー」と言われている。日本全国で栽培されていたようで、天然の藍はピレスロイドが含まれているため蛇や虫が寄りつかないと言う。
- ③ 紫根（しこん）：ムラサキの根で、高貴な色である紫色の着色原料。関東ローム層や大山・阿蘇が生産地。ヤブツバキの木を燃やした灰を媒染剤として用いて染めた。

## (3) ベニバナから紅へ

- ① ベニバナは古代エジプトのピラミッドからも発見されているが、日本へは3~4世紀、朝鮮を経て中国（三国時代の呉）から伝わったと言われている。そのため「呉藍」とも言う。ベニバナは茎の先の少し赤い花弁を摘み取るので、源氏物語に出てくる「末摘花」とも呼ばれる。
- ② 「延喜式」には中男（17~20歳の男性）の作物として全国24カ国から納めるよう定められた。伊賀地方から大量の納入があった記録がある。江戸時代になると、北前船を利用した交易作物として山形県最上地方の「最上紅花」が京へ運ばれるようになり、有名になった。
- ③ ベニバナの加工は、乾燥させたベニバナを水で洗って黄色の色素を除去した後、発酵させて赤色色素の多い紅餅を作る。紅を取るには、紅餅に灰汁や食酢を加えたうえ、烏梅（うばい）の液を使うなど複雑な工程を経て作る。（烏梅とは完熟した梅の実を煤でまぶし、蒸し焼きにして天日干ししたもので、生産地として奈良県月ヶ瀬が有名である。）
- ④ 東大寺お水取り（修二会）に使われる椿の造花にもベニバナの紅が使われている。



烏梅

【所感】今後とも自然な色彩を出す植物を利用した染色技術が途絶えることがないよう期待します。